

茶

茶病害虫防除対策推進事項

- (1) 主要病害虫の体系防除を推進する。農薬の使用にあたっては、農薬使用基準を厳守すること。
- (2) 薬剤の散布量については、クワシロカイガラムシ及びカンザワハダニについては、各項目の注意事項を参考にし、その他については原則として200～400L/10aとする。
- (3) 薬剤によっては農薬登録の変更にもない使用時期、使用回数及び希釈倍数・使用量がこれまでと異なるものがあるので、必ず使用条件を確認する。

炭疽病 *Discula theae-sinensis*

I 防除の狙い 6～7月頃（一番茶の遅れ芽と二番茶芽）と9～10月（秋芽）に発生が多い。本病菌は25℃付近で発生が盛んであり、雨滴とともに飛散伝染する。

II 防除法

1. カリ質肥料が不足しないよう注意する。
2. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

もち病 *Exobasidium vexans*

I 防除の狙い 主として6～7月頃と9～10月に発生する。多湿の天候が続くとき、または陰湿地や山間地などに発生が多い。

II 防除法

1. 窒素質肥料の過用は避ける。
2. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

[注意] 常発地：萌芽直前は銅剤、直後はステロール生合成阻害剤の効果が高い。

網もち病 *Exobasidium reticulatum*

I 防除の狙い 胞子形成の最適条件は、温度19～25℃、湿度95%であり、秋芽の生育初期に感染しやすい。潜伏期間は約2ヶ月である。

II 防除法

1. 窒素質肥料の過用をさける。
2. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

輪斑病（新梢枯死症） *Neopestalotiopsis* spp. *Pestalotiopsis longiseta* *Pestalotiopsis theae*

I 防除の狙い 菌糸の生育適温は、25～28℃で、摘採や整枝などで葉や茎の傷口に分生胞子が付着して感染発生する。防除は、摘採、整枝直後が効果的である。

さらに、新芽が出開いた後に新梢全体が枯死する「新梢枯死症」も発生する。これは、包葉、不完全葉の離脱部から感染発生するので、新芽の生育期に防除を行う。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

苗根腐病 *Pythium* spp. *Cylindrocladium canadense*

I 防除の狙い 病菌の発生の最適温度は24～28℃、最高温度は34℃付近、最低温度は8℃付近である。主として土中に残存する病根組織中で菌糸または胞子の形で越冬し、これが翌年の伝染源となる。本病は5～6月頃から9～10月頃にかけて発生し、特に8月頃に激発する。

II 防除法

1. 無病地に苗床をつくる。
2. 苗床の排水をよくする。
3. 発病苗床はさし木の3～4週間前までに下記薬剤で消毒する。

4. 薬剤処理

薬 剤 名	使 用 量	処 理 期 間
ディ・トラベックス油剤	50リットル/10a	は種又は植付の21日前まで

[注意] 野菜・花き共通事項3の定植前土壌消毒の項を参照。

赤 焼 病 *Pseudomonas syringae* pv. *theae*

I 防除の狙い 細菌による病害で、傷から感染する。早春期～一番茶期頃と秋期に発生し、特に幼木園での被害が多い。台風、季節風など強い風による付傷後に感染するほか、摘採、整枝によっても感染する。防除は、春秋の強風の後、及び摘採、整枝後にできるだけ早く薬剤散布を行う。

II 防 除 法

1. 発生園では、中切りや深刈りによって病葉、病枝条を切除し、伝染源を少なくする。
2. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

チャノココクモンハマキ

I 防除の狙い 年4～5回発生し、二～三番茶で被害が多い。卵は硬葉の裏面に魚鱗状に産みつけられる。防除は幼虫ふ化最盛期を目安に行うことが適切である。

II 防 除 法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

[注意] 防除適期は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期の頃、その他の薬剤は発蛾最盛期から夏期では約7日後、秋期では約10日後である。

チャノホソガ（チャノサンカクハマキ）

I 防除の狙い 一番茶の末期、二、三番茶の早期、及び秋芽が被害を受けやすい。本虫の被害は巻葉内虫糞であり、茶の品質が著しく低下する（水色が赤味になる）ので、巻葉前防除、または摘採期の場合は出来るだけ早く摘採を行う。

II 防 除 法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

ヨモギエダシャク

I 防除の狙い 年3～4回発生する。3齢以降は葉縁から食害し、6齢幼虫では体長50mmほどになり、摂食量が多く被害も大きい。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、体長が20mm以下のときに防除する。発生初期に発見し、幼虫が分散する前に部分的な防除を行うことが有効である。

II 防 除 法

1. 茶樹、茶園周辺の木、板や柱に産下された卵を除去する。
2. ヒメバチの1種、クワゴヤドリバエ、ヒメコバチ科の1種等の天敵が存在する。
3. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

チャノミドリヒメヨコバイ

I 防除の狙い 主として、二、三番茶及び秋芽に被害を与える。成、幼虫ともに茶芽を吸害する。被害葉は黄変し、先端が枯れ、ついには落葉し、収量、品質が著しく低下する。発生回数が多い（年4～8回）ので定期的に防除する。

II 防 除 法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

チャノキイロアザミウマ

I 防除の狙い 本虫は体長約 0.9mm、体は黄色で年5～6回発生する。成虫が茶樹の幹の割れ目や葉の間で越冬し、4～5月頃から活動を始める。発生が多いのは6～9月で、春から夏にかけて少雨の

時に多発する。被害葉では、葉の裏面の中肋に沿って数本の褐色線が現れ、表面葉柄近くの基部が褐変し、干害を受けたように萎縮する。

II 防 除 法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

ツマグロアオカスミカメ（ウスミドリカスミカメ）

I 防除の狙い 成虫は体長 4.2mmで淡緑色、幼虫はふ化直後は 1.2mmである。卵で越冬し、年4回発生する。4月上旬頃からふ化し、成・幼虫ともに茶芽を吸汁加害する。そのため芽の発育は止まり、新芽には無数の穴があく。被害程度が大きくなると、凍霜害を受けたように芽が伸びず、収穫皆無になる。

II 防 除 法

1. オオマツヨイグサ、アレチノギク、ヨモギなどにも発生するので、茶園周辺の除草も有効である。
2. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

クワシロカイガラムシ

I 防除の狙い 年3回発生し、雌成虫で越冬する。ふ化した幼虫は直射日光の当たらない樹皮の割れ目や枝の下側に好んで移動し、定着する。寄生様態については、雌は分散後カイガラを形成し、雄は群がって蛹になる。定着すると脚は消失して移動できないが、衣類や摘採袋などへの付着により、他の茶園へ伝搬される。防除は、1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤に対する抵抗力が強くなるので、ふ化直後の幼虫が活動する枝や幹に薬剤が十分かかるように散布する。多発の場合は、一番茶後（第一世代幼虫ふ化期）に中切り更新と薬剤防除を併用処理すると防除効果が高い。

II 防 除 法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

- [注意] (1) 薬剤散布は幼虫ふ化盛期(50%ふ化卵塊雌率が半数となった日)～ふ化盛期5日後(目安は第1世代: 5月中～下旬、第2世代: 7月中～下旬、第3世代: 9月中～下旬、暖地ではさらに早まる可能性がある)
- (2) 薬剤散布量は、一般園では1000L/10a、更新園では200～300L/10aである。

ナガチャコガネ

I 防除の狙い 年1回発生する。幼虫で越冬し、成虫は5月下旬から7月中旬に発生する。幼虫が秋期に茶の根を食害し、翌年の一番茶芽が生育しなくなり減収する。10月下旬～11月の気温が下がる時期にナガチャコガネ幼虫は地表近くの浅いところに上昇してくる。薬剤の種類により、成虫発生初期(6月)、もしくは幼虫が地表近くに上がる時期(10月下旬～11月)に防除する。

II 防 除 法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

カンザワハダニ

I 防除の狙い 雌成虫で越冬し、2月下旬頃から産卵を始め、3～6月、9月、11月に多く発生し、葉を吸汁加害する。越冬前、越冬後の防除により一番茶期の被害を予防し、激発する前に防除を徹底する。

II 防 除 法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

- [注意] (1) 秋冬期、早春の防除を徹底する。
- (2) 薬剤散布量は400L/10aとする。
- (3) 殺ダニ剤は連続施用すると薬剤抵抗性を発達させる恐れがあるので、各薬剤の使用は年1回散布とする。

チャノナガサビダニ

I 防除の狙い 4月～6月（一番茶・二番茶期）、9～10月（秋芽生育期）に多発する。古葉にも寄生するが、やや硬化した新葉の葉裏を加害する。被害葉では葉裏が茶褐色になり、葉全体が萎縮する。夏期に更新園及び三番茶の摘採を行わなかった園の防除、また、秋芽生育期の防除を徹底する。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

チャノホコリダニ

I 防除の狙い 8月～10月（秋芽生育期）にかけて多発する。新葉の葉裏を加害し、被害葉では葉裏が褐変して葉がひどく縮れる。このような被害を受けた茶芽は生育が著しく遅延する。秋芽生育期の防除を徹底する。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

マダラカサハラハムシ

I 防除の狙い 成虫または幼虫で越冬し、一、二番茶や夏芽、秋芽を食害しながら次第に発生数が増加していくと考えられる。成虫の食害により、若葉に円形の穴が開いたり、新梢を食害して新芽が折れるなどの被害が生じる。発生園では夏芽整枝後～秋芽萌芽期の防除を徹底する。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

チャトゲコナジラミ

I 防除の狙い 発生茶園においては、冬期にマシン油乳剤の散布を行い、越冬密度低減を図る。一番茶以降は成虫の発生を観察し、成虫の発生が見られなくなった若齢幼虫発生期に防除を行う。葉裏に薬剤が十分かかるよう、裾部から茶株頂上部に向けて斜め上方向に薬液を散布する（裾重点散布法）。散布前に裾刈りを行うと、薬液の付着程度が向上し防除効果が高まる。天敵としてシルベストリコバチが有効なので、発生園ではシルベストリコバチに影響の小さい農薬を使用する。

II 防除法

1. 裾刈り、更新、秋整枝等により枝葉を取り除くことで害虫密度を下げる事が可能である。
2. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

[注意] 赤焼病常発園では冬期にマシン油乳剤を使用すると発病を助長する。その場合、マシン油乳剤散布3～7日前に銅水和剤を散布することで、赤焼病の被害を軽減できる。

茶 共 通 事 項

共通事項 1 薬剤耐性菌・抵抗性害虫対策

薬剤耐性菌・抵抗性害虫の発生を避けるため、同一薬剤、同一系統の薬剤の連用、過剰使用を避ける。薬剤の効力低下がみられた場合は他の薬剤、他系統の薬剤により防除する（各薬剤防除一覧表の「作用機構による分類」を参照）。また、薬剤以外の防除手段にも積極的に取り組むことも重要な対策である。

共通事項 2 殺ダニ剤の特性

薬 剤 名	効 果			残 効	速 効 遅 効
	殺 卵	殺幼若虫	殺成虫		
アーデント水和剤	×	○	○	○	速
アグリメック	×	○	○	○	速
ダニコングフロアブル	○	○	○	○	遅
コテツフロアブル	○	○	○	○	速
サンマイトフロアブル	○	○	○	△	速
ダニゲッターフロアブル	○	○	△	○	遅
ダニサラバフロアブル	○	○	○	○	速
スターマイトフロアブル	○	○	○	○	速
テルスター水和剤	×	○	○	○	速
テルスターフロアブル	×	○	○	○	速
バロックフロアブル	○	○	×	○	遅
マイトクリーン	○	○	○	△	速
マイトコーネフロアブル	×	○	○	○	速
ミルベノック乳剤	△	○	○	○	速